

近代朝鮮半島における 政治空間に対する認識の変容 ：家・郷・国・天下から国内・国際へ

姜 東 局

1. はじめに

本稿は、近代朝鮮半島における政治空間に関する認識の変容を取り扱う。朝鮮半島の近代政治思想史研究において、国内政治をめぐるのはナショナリズムが、国際政治をめぐるのは近代的な外交論が中心的テーマの一つであり続けてきたことからすると、このテーマに関する議論はすでに十分に行われたかのように見えるかもしれない¹⁾。確かに、ナショナリズムと近代的な外交論の考察は、各々国家内部の政治空間と国家間の政治空間をめぐる認識の変化を前提とするため、このテーマに関して相当な研究があったといえよう。そして、本稿がこのような研究成果の基礎に立つことになるのもいうまでもない。

ところが、このような研究の蓄積が、近代朝鮮半島における政治空間認識の変容の全体像を示すことにつながっているかという点、そうではない。なぜなら多数の研究は国内と国際の空間に集中され、それ以外の空間には広がらなかったからである。このような先行研究の不均衡は、直接的には政治空間の全体像の提示に関する各々の研究者の問題意識が弱かったことの結果であろうが、その背景には、個々の研究者には還元しきれない問題

1) ナショナリズムに関する先駆的な研究としては、李用熙著・盧在鳳編『韓国民族主義』瑞文堂、1977年と金榮作『韓末ナショナリズムの研究』東京大学出版会、1975年を、また、最近の研究については、月脚達彦『朝鮮開化思想とナショナリズム：近代朝鮮の形成』東京大学出版会、2009年を参照。外交論に関する研究としては、金容九『世界観衝突と韓末外交史：1866-1882』文学叢書 知性社、2001年や張寅性『近代韓國의 國際觀念에 나타난 道德과 權力』서울大学校出版部、2006年、そして金聖培『儒教的思惟와 近代國際政治의 想像力：旧韓末 金允植의 儒教的 近代受容』創批、2009年を参照。

が潜んでいるように思われる。

ナショナリズムや近代的な外交論を取り扱った政治学・国際政治学者は、現在の学問分野への帰属意識を捨てないまま研究テーマにアプローチする傾向があった。このような態度によって、第一に、国内と国際以外の政治空間が想定できなくなり、第二に、政治空間が分立されていることが前提とされる。この二つの特徴は、近代国家が持つ主権が、国内的には最高至上であり、対外的には独立であるという特徴を考慮すると自然に理解できよう²⁾。ところが、周知のとおり、主権の概念は政治的アクターである近代国家が登場する西洋の特定の歴史的な文脈の中で生まれたものである。その結果、国内政治と国際政治という二つの政治空間だけの存在と互いの明確な分立は、近代朝鮮の政治空間の変容の終着にはなるが、出発にはなれない。実際、儒学、その中でも朱子学から政治空間を理解していた19世紀中盤の多数の朝鮮王朝の人々は、政治を含めた人間の社会的な活動の空間を、原理的に連続性を持つ家・郷・国・天下として理解していた。したがって、近代朝鮮半島の政治空間の変容の全貌を把握するためには、異なる文明的背景を持つ政治像の関係を考慮しながら、考察を行う必要がある。

以上のような批判的観点に立つ本研究では、19世紀後半の韓国・朝鮮においては、西洋近代とは本質的に異なり「家・郷・国・天下」という連続した政治空間認識が存在していたという歴史的な事実を前提に、このような認識が如何なる過程をへて、20世紀初頭において国内政治と国際政治という二つの断絶した政治空間認識へ変わっていったかを明らかにすることを目指す。この大きな課題を十分に随行するためには、民衆をも含めた多様な人々の認識を取り扱うべきであるが、そのような総合的研究は筆者にはまだ不可能である。そこで、本稿では、政治空間の変容をめぐる抽象的な議論をリードしていた知識人の認識に研究対象を限定することにしたい。

2) 西洋近代における主権概念の歴史については、Andrew Fitzmaurice, *Sovereignty, Property and Empire, 1500–2000*, Cambridge University Press, 2014 を、朝鮮半島における主権概念の受容に関しては、朴相燮『韓国概念史叢書2：国家・主権』小花、2008年を参照。

2. 予備的考察：朝鮮王朝後期における政治空間

朝鮮王朝は、その創成期から儒学、その中でも朱子学を正統なイデオロギーとみなした結果、人が生を営む空間も基本的には朱子学によって理解された。『大学』は、原始儒学と区別される朱子学の理念を明確に表す経典である『四書』の中でも、学習の順序で筆頭に位置付けられているほど重要なテキストであるが、この本の冒頭に朱子学における人間の生きる空間の理解が明確に提示された。そこでは、人間の生き方を説明する八つの条目が提示されたが、その前半の「格物－致知－誠意－正心」は修養の過程であった³⁾。次の「修身」は個人が完成した段階をさしているが、その後「齐家－治国－平天下」の三つの条目が続く⁴⁾。個人が人生の中で行うべき各々の行為の範囲、あるいは対象になる「家－国－天下」は、まさに『小学』にとどまらず、『大学』という高度なテキストを学ぶと想定されていた士大夫が活躍すべき空間であった。その活動の中心的なもの一つを近代的な概念で捉えたと政治になることは、「治」や「平」という言葉からわかるであろう。したがって、『大学』に代表される朱子学において、個人（身）が活動すべき政治空間は、「家－国－天下」という三つのレベルによって重層的に構成されていると認識されていたといえよう。

このような朱子学の政治空間の構成は、西洋近代の政治が想定している政治空間と比べると、第一に、「家」が一つのレベルと想定された結果、三段階になっている点において、その形式の面における差が明確である。古代ギリシャにおいて家政（*oikos*）の舞台になる家族は、ポリス的な活動の妨害になるがゆえに政治空間から排除されていた⁵⁾。ところが、儒学における「家」は、人間の人間らしい社会的な行動の出発点として重視されてきたが、朱子学ではこの点をさらに強調した結果、朱子は自ら『朱子家礼』を著すなどして、「家」をも「礼」によって治められる理想的な政治空間にするために努力を注いだのである⁶⁾。

3) 朱熹『四書章句集注』中華書局、1983年、3頁。

4) 同上。

5) ギリシャにおけるポリスと家族の関係に関しては、ハンナ・アーレント著・志水速雄訳『人間の条件』ちくま学芸文庫、1994年、49-59頁を参照。

6) 朱子学における「家」をめぐる思想の展開とそれに歩調を合わせた宋代の「宗族形成運動」に関しては、小島毅『中国の歴史7 中国思想と宗教の奔流：宋朝』講談社、2005年、212-217頁を、また、宋代における「家」の礼の歴史的な展開

第二に、朱子学と西洋近代における政治空間認識の差は、空間の間の関係性においても存在した。すなわち、西洋近代における国内政治と国際政治は、基本的に分離されていると理解されてきた。すでに述べたとおり、一つの主権が君臨する空間とそれぞれの主権をもつ複数のアクターが活動する空間は、鋭く分離されたのである。国内政治と国際政治を取り扱う分野が狭義の政治学と国際関係学に分立されたのは、政治空間の分裂という認識の学問的な制度化ともいえよう。ところが、朱子学において、空間の間の関係性には、区別とともに明確な連続性も存在した。周知のとおり、朱子学は「理学」とも呼ばれたが、それは「理」という概念が朱子学の原理的な基礎になるという理解に基づいている。この「理」は自然や社会を含めた全世界を貫く原理であるが、このような偏在性は人間の政治空間においても例外ではなかった。すなわち、「理一分殊」という原理からすると、「家－国－天下」という政治空間の間には他と区別される特性があったが（＝分殊）、それらを貫く普遍的な原理もあったのである（＝理一）⁷⁾。このような政治空間の連続性の認識の存在やそれがもつ政治的重要性は、中国や朝鮮における実際の政治制度を一見するだけで確認できる。たとえば、明・清において、朝貢国との関係は礼部が担当し、朝鮮においては、礼曹がおなじ役割を担当していた。しかも、両国において、これらの機関は皇帝や国王の即位など王朝内部の礼をも担当していた。また、礼という原理は、すでにふれたとおり「家」を支える原理でもあった。「家－国－天下」の政治空間は、究極的には同じ原理を共有するという意味で、連続という関係性を有していたことがわかるであろう。このような状況の中で、西洋近代のように、主権がもたらす断絶の特性から国が他の政治空間と区別される特別な意味を持つことは、そもそも不可能であった。

先述のとおり、朝鮮王朝は朱子学の原理を尊重したので、以上のような朱子学の政治空間の議論は朝鮮王朝の政治空間の認識の基礎となった。ところが、朱子学が重要であったぶん、政治に関する議論の際に朱子学に関

については、Dieter Kuhn, *The Age of Confucian Rule: The Song Transformation of China*, Harvard University Press, 2009 の「7. Life Cycle Rituals」を参照。

7) 「理一分殊」の意味やその朱子学体系における意義については、Peter K. Bol, *Neo-Confucianism in History*, Harvard University Asia Center, 2008, pp 200-202 を参照。また、「家」と「国」における原理の同一性と相違性については、李相益『儒教伝統과 自由民主主義』심삼, 2005 年の第九章「儒教에 있어서 家族과 国家」を参照。

する議論が活発に行われたことで、朝鮮王朝の政治の現場において朱子学は政治の実態を反映する形で具体化され、場合によっては変容されることになった。したがって、朝鮮後期という時空間においてこのような朱子学の原理が実際どのように具体化していたのかは、歴史的に検証すべき課題になる。

朝鮮中期以降、士林派は勲旧派と呼ばれた中央政治の実力者と対立しながら、朱子学の信念に基づいた政治運動を展開していった。彼等は、地方において活発に活動を行ったうえで、中央政界へ進出し、政治権力を掌握したが、この過程は朝鮮王朝の後期を規定する朱子学の現実的な姿が明確になっていく過程でもあった。本稿で注目する政治空間をめぐる実際の認識にも、この変動から生まれた特徴が影響した。まず、「家－国」に関する認識に対しては、以下の二点が特筆すべきものであろう。

第一に、思想空間の再構成における下から上への方向性である。朝鮮王朝の成立（1392）は、基本的に中央政界における変動として現れたため、仏教から朱子学への変化に代表される思想の変化も、国王のいる中央から各地へ、言い換えれば、上から下への方向性にそって展開された。ところが、このような方向性と対立する方向の政治運動が朝鮮後期の政治思想を基本的に規定することになった。すなわち、朝鮮王朝初期の政治の混乱の後、とりわけ、世祖（在位 1455-68）によるクーデター後の主流の政治勢力（＝勲旧派）は、主に世祖の政変における功労によって権力を手に入れた勢力であったが、政治権力への強いこだわりをもっていった彼等において、朱子学の思想性はそれほど強くなかった。一方、勲旧派の政治に批判的であった士林派は、中央政界から疎外され、地方において朱子学の教えを実践することから政治的な活動を始めた。彼らは朱子学の教えによって、自ら「修身」を実践するとともに、『朱子家礼』に書かれている礼を行うための家族の構造を変えるなどして、「齐家」をも実践したのである⁸⁾。そして、組織された力による中央権力の掌握に成功することで、次の段階である「治国」までも成し遂げた⁹⁾。その結果、朝鮮王朝においては、国

8) 朝鮮王朝において、約 250 年間にわたって行われた宗族社会への変化については、Martina Deuchler, *The Confucian Transformation of Korea: A Study of Society and Ideology*, Harvard University Asia Center, 1992 を参照。

9) 社会・経済的な要素より、政治・制度的な要素に注目しながら、中央政治における士林派の台頭を取り扱った新しい研究としては、金範『士林禍 反正의 時

以下のレベルで『大学』に書かれている通りの底辺からの段階的な広がり
が実際存在していた。その結果、「身」—「家」—「国」のレベルにおける
朱子学的な世界観の自立性において、前者のほうが強い現象の歴史的な
基盤ができたのである。

第二に、「郷」レベルの重要性である。古代とは異なる広大な領土を郡
県制で支配していた宋代の中国では、家と国・天下の間があまりにも離れ
ていた。このような政治的な状況は、政治的無関心や福祉の欠如へつなが
る可能性があった。家と国の間に「郷」というレベルが台頭したことは、
このような背景からして理解できる。ウッドサイド (Alexander Woodside)
が指摘したとおり、宋代において郷の政治空間にあって、準自律的非政府
組織 (quasi-autonomous non-governmental organization) として郷約が朱子
学者の理論的な支持を受けながら台頭したのは、このような問題状況への
一つの解決であった¹⁰⁾。朝鮮王朝もこのような問題状況を共有していたこ
とから、朝鮮王朝においても郷約が重視され、郷の政治空間が台頭するこ
とは自然なことに見える。

ところが、朝鮮王朝においては独特な政治史的な背景の存在が、「郷」
の政治空間の重要性をさらに高めた。その背景とは、先述した士林の台頭
の歴史的な過程である。成宗の時代 (1470-94) に金宗直 (1431-1492) を
筆頭とした士林派が中央政界に進出した際に、すでに廃止されていた留郷
所を復活させ、『周礼』の「郷飲酒礼」を行う中心機構とした点¹¹⁾、また、
中宗の時代 (1506-44) の趙光祖を中心とする士林派の再進出においては、
朱子が手を加えた呂氏郷約を全国に行おうとした点からわかるように¹²⁾、
士林派において「郷」の政治空間は彼等の政治の根拠地であると同時に主
な対象でもあった。郷の政治空間は、朝鮮王朝の政治変動において決定的
な役割を演じることになり、その結果、朝鮮後期において政治空間として

代』歴史의 아침, 2015年がある。

10) Alexander Woodside, *Lost Modernities: China, Vietnam, Korea, and the Hazards of World History*, Harvard University Press, 2006 の第三章を参照。

11) 士林派の留郷所に関する議論については、韓永愚『朝鮮前期社会思想研究』知識産業社、1983年、92-97頁を参照。

12) 士林派の中央政治への再進出と郷約の推進に関しては、同書、97-108頁を参照。また、朝鮮王朝の儒学者における郷約の意義の共有については、李滉 (1501-1570) の事例を参照 (鄭震英「郷約、退溪가 꿈꾼 理想社会」『安東学研究』12、2013年、53-76頁)。

の郷は、郷約を持つ他の儒教圏の国家—すなわち、中国とベトナム—とは区別される重要性を持つことになったのである。そして、以上の「家—郷—国」に関わる政治空間の特徴は、17世紀に入って朝鮮王朝の中央政界において士林派の主導権が明確になってからも、大きく変わることはなかった¹³⁾。

一方、朝鮮後期には「国—天下」の政治空間においても、特有の性格が現れたのである。この特徴も国家の上のレベル、すなわち、天下の政治空間における重要な政治史的な事件と深くかかわりを持ちながら浮上してきた。17世紀における天下レベルでの最大の問題は、言うまでもなく明清交替による東アジアの大変動であった。朝鮮王朝はこの過程で現実的に、後金と清による二回にわたる直接的な侵略—1627年と1636年—を経験したし、結局は、正当な中華と認めていた明の代わりに夷狄とみなしていた満州族の清が中原の王朝を立てた天下の中で、清の朝貢国になったのである。清を正当な中華とは認めることが出来なかった多数の朝鮮王朝の人々は、清が支配する天下の中で清を中華と認めないまま、如何に安全を確保することができるのかという複雑な問題に直面した。まず、明の残存勢力と連帯して正当な中華である明を回復することで、天下の秩序を正そうとする試みが現れたが、1662年に南明が滅びた結果、このような現実の変革は困難になった。そこで、朝鮮を明の正当な継承者の中華とみなす小中華の流れが台頭し、それが国家の原則として認められるにいたったのである¹⁴⁾。その結果、「天下」と「国」という二つの政治空間は、対立的に分離されたのである。すなわち、小中華の支持者においては、普遍的な原理に支えられる連続性は、観念的な中華である明と朝鮮の間に存在したが、実際に存在していた清の天下との関係には存在しなかったのである。その後、清の寛厚さや文明の高さを認めることで、清を真の中華と認める立場も徐々に強くなったが、儒教の原理を実践するという基準から朝鮮王朝を中

13) 朝鮮前期と後期をわける17世紀を対象に、士林の政治思想の継承を取り扱った研究としては、韓国歴史研究会17世紀政治史研究班『朝鮮中期政治와 政策：仁祖—顯宗時期』아카넷、2003年を参照。

14) 小中華主義、あるいは、朝鮮中華主義に関する草分け的な研究としては、鄭玉子『朝鮮後期歴史의 理解』一志社、2003年を、また、鄭玉子の主張を継承しながらも、東アジア地域の視野を入れることで、議論のさらなる展開を見せた最近の研究としては、禹景燮『朝鮮中華主義의 成立과 東亞細亞』유니스트리、2013年を参照。

華とみなす観点は、19世紀まで維持されたのである¹⁵⁾。

以上のように、朝鮮王朝後期における政治空間の認識には、朱子学の政治空間に対する一般性とともな朝鮮王朝なりの特殊性が共存していた。このような二つの側面の共存によって、朝鮮半島における政治空間の近代的な変容は、朱子学を体制教学としていた国家一般の事例になると同時に、朝鮮半島の特殊な事例にもなるのである¹⁶⁾。

3. 「天下」から地域へ：西洋の台頭による「天下」空間の変容

19世紀後半から本格化した西洋近代との交渉は、朝鮮半島における政治空間の変容をも迫った。アロー号戦争の際の北京占領(1860)などから、朝鮮王朝においても西洋が無視できない実質的な影響力を持っているという認識が広範囲に広がった。また、知識・情報の面においては、『万国公法』(1865)などの漢籍によって西洋の世界認識が理解されることになった¹⁷⁾。その結果、この新しい存在は現実的に、また原理的に、朱子学が想定した天下を越えていることを認めざるをえないという認識も徐々に広がりを見せた。西洋の独自性を認めた場合、既存の天下において世界の中心であった東アジアは、一つの地域へと変わり、その上に西洋までを含める地球レベルの世界が実質的な天下にあたることになる。「天下」の政治空間をめぐるこのような変化は、これまでの朱子学に基づいた世界認識に他の文明の要素が入るという意味で、確かに大きな認識の変化になりえた。ところが、朝鮮王朝の相当な数の知識人には、この変化が政治空間を全面的に変容させる大変動とは見えていなかった。「郷」や「家」の政治空間を活動の中心にしていた多数の士大夫の生き方に「天下」の政治空間の変化が直ちに影響しなかった点から、「天下」の政治空間の変化がもたらす衝撃は相当に和らげられていたのである。

15) 朝鮮後期における清との関係に関する継承と変容については、許太裕『朝鮮後期 中華論과 歴史認識』아카넷, 2009年や박현모 (Park Hyun Mo) 『正祖死後 63年: 勢道政治期 (1800-63)의 国内外政治研究』創批, 2011年、238-241頁を参照。

16) たとえば、家という漢字を共有しながら、その政治的な意味が朝鮮王朝とは異なっていた日本の事例については、渡辺浩『日本政治思想史：17-19世紀』東京大学出版会、2010年の「第四章 「家族国家」と「立身出世」」を参照。

17) 「万国公法」概念を中心に、この変化の過程を取り扱った研究としては、金容九『韓国概念史叢書 1：万国公法』小花、2008年を参照。

その一方で、西洋近代が支配する世界の政治空間の浮上が「国」以下の政治空間には影響しないことで、「天下」における変化と「国」以下における持続が共存する可能性が想定できるだろう。実際、1880年代の朝鮮半島において、このような可能性は現実になっていた。そのきっかけは、1880年から始まったアメリカとの条約締結をめぐる動きであった。とりわけ、1881年に紹介された『朝鮮策略』は、西洋の台頭という変化を如何に理解し、また、それに如何に対処するかをめぐる論争を朝鮮全土に広げた¹⁸⁾。駐日清国公使館から発せられたこの文書では、ロシアの脅威を中心に天下の情勢を説明したうえ、それに対する朝鮮の方策として中国・日本に加え、アメリカとの協力を促したのである。政治空間の観点からすると、この提案によって持たされる重要な変化は、脅威＝ロシアの侵略や対処＝アメリカとの同盟の両側面において、世界の政治空間が前面に出たことであった。

ところが、この提案に対する朝鮮王朝の儒教的知識人の反応の典型は、嶺南万人疎に代表されるように、徹底した反対であった。すなわち、彼等はロシアの脅威の存在に疑問を呈するとともに西洋諸国を夷狄と見なしたが、前者は範囲の側面から、後者は原理の側面から、「天下」の政治空間にこだわった結果でもあった。一方、朝鮮王朝の中央政府には、世界情勢の変化を理解していた高宗を中心とした勢力があった。彼等はアメリカとの条約が必要だと考えていたが、士林による強い反対運動に直面したのである。この政治的な対立は、複雑な政治過程を経て、高宗が嶺南の士林には彼らの主張を認める意思をあらわすことで、国以下の政治空間における変革を推進しない姿勢を見せるとともに、世界の政治空間ではアメリカとの国交は結ぶ（1882年）という妥協によって解決された。その結果、1880年代にはいって、朝鮮半島の政治空間の認識には、以前の「郷一家一國」の政治空間が健在であった一方で、国家の上位では、西洋をも含めた世界の政治空間が台頭したのである。

ところで、以上のような世界の政治空間の浮上は、ただちに既存の「天下」の政治空間の消滅を意味するものではなかった。アメリカとの条約に清が重要な役割を演じたことからわかるように、「天下」の政治空間は、

18) 『朝鮮策略』をめぐる朝鮮王朝の政治言説については、姜東局「中国的世界秩序の変容と言説：『朝鮮策略』の「親中国」をめぐる議論を中心に」『思想』第944号、2002年、92-109頁を参照。

世界の政治空間の浮上と関わりながらむしろ強化されたと見える面もあった。このような認識は、地方の士林と高宗などの中央政治家において共有されていたのである。この二つの政治空間は朱子学と西洋近代という二つの文明の原理によって区分されていたが、異なる原理を持つ政治空間の並存は、それが登場した当初には、各々の原理も区分されていたことから、それほど問題になっていなかった。ところが、1880年代の中盤以降、清の朝鮮への政策が以前の天下の政治空間に対して、西洋近代に見られるような直接的な関与へと転換した結果、朝鮮の政治家は、清と朝鮮の関係を「天下」の政治空間と世界の政治空間の観点から如何に理解すべきかという難問にぶつかったのである。

兪吉濬（1856-1914）は日本とアメリカの留学経験を持ったことから、当時の西洋や国際情勢の理解において頭角を現していた知識人であったが、『西遊見聞』という著作の中で、「兩截体制」という概念を提示することで、天下の政治空間で発生した問題の解決に挑んだ¹⁹⁾。彼のいう「兩截体制」とは、異なる原理に基づいた複数の国際秩序が共存する場合に、各々の国際秩序は、互いに干渉しないことを意味した。彼はこの主張の正しさを裏づけるために、一つの国際秩序において、朝貢国である国家と受貢国である国家に対して、他の国際秩序の諸国は両国とも同じく平等な国家として取り扱うという事例を挙げているが、これは言うまでもなく、当時の朝鮮王朝における西洋諸国や清国との関係を想定しているものであろう²⁰⁾。すなわち、兪吉濬は、朝鮮が儒学に支えられる天下の中で清の朝貢国であることが、西洋近代の原理が支配している世界の中で諸国と対等な独立国になることの妨げにはならないことを主張したのである²¹⁾。この言説は、朝貢国と属国（dependent state）がもつ共通点と相違点の一方を強調することで、朝鮮の地位をめぐる議論が繰り広げられていた中、二つの国際秩序を区別し、議論の混乱の余地を無くすことで、天下と世界における朝鮮の両側面をともに肯定する理解をもたらした。「天下」と世界の政

19) 兪吉濬の政治思想については、鄭容和『文明의 政治思想：兪吉濬의 近代韓國』文学斗 知性社、2004年を参照。

20) 兪吉濬『兪吉濬全書（I）』一潮閣、1971年、117頁。

21) 「兩截体制」に対する国際法の観点からの解釈については、PARK Pae Keun “Introduction of Western International Law into East Asia - Mergence or Conflict and Substitution : YU Kil-chun’s Argument of the Yangjul (Twice Folded) System” 『国際法学界論叢』第123号、2011年、pp. 247-273を参照。

治空間の分立と共存を強調することで、それらをつなぐ際に現れる混乱が清のような大国の利害によって利用される可能性を理論的に根絶したと評価できよう。

以上のように「両截体制」は朝鮮王朝をめぐる国際関係の政治空間に対する明確な説明を提供していたが、この理論は、現実に変化をもたらすことはできなかった。なぜなら、1880年代中盤からの二つの国際秩序の共存を支えていたのは、理論ではなく勢力関係であったからである。すなわち、世界政治における西洋の絶対的な優勢と東アジアにおける清の相対的な優勢が、この共存を可能にしたのである。すると、世界政治の主導権が変わらない状況では、地域における勢力の変動が「天下」の政治空間の変容をもたらすことによって、共存が崩壊される可能性が存在した。周知のとおり、日清戦争によって清の優越が崩れたが、この変化はまさに「天下」の政治空間の崩壊によって、朝鮮をめぐる国家の上位の政治空間が西洋近代の世界へと一元化されたことを意味した。すなわち、日清戦争の後には、「天下」の政治空間は自立性を失い、国際的政治空間だけが残ったのである。

4. 西洋近代の政治空間の国内的な適用と反発 ：甲午の改革をめぐる葛藤

前章で考察したとおり、1880年代において「天下」と世界の政治空間をめぐる認識は大変動をみせていたが、「家－郷－国」の政治空間に関する儒教的な認識は、相変わらず健在であった。もちろん、この時期においても「国」以下の政治空間の再構成の動きがまったくなかったわけではない。たとえば、急進的な政治改革を目指した甲申の政変（1884）の際に、政治空間の再編成の端緒が見えた。金玉均を中心とする勢力が目指した改革の見取り図ともいえる政綱14条の中には、「二. 門閥を廃止し、人民平等の権を制定して、才能によって官吏を登用し、官職によって人を選ばないようにすること」や「三. 全国の地租法を改革し、奸吏を根絶し、窮民を救済し、国家財政を充実させること」という条項が見える²²⁾。前者は地方の自立性を支える身分制を撤廃している点、後者は財政における国家の

22) 政綱14条の存在をめぐる議論やその文献学的な再検証については、李光麟「甲申政変「政綱」에 対한 再檢討」『開化期研究』一潮閣、1994年、19-35頁を参照。

一元的な管理を目指している点から、家や郷の政治空間を相対化し、国家の政治空間への収斂を目指す傾向が見える。ところが、周知のとおり、政変はわずか三日で失敗したため、この志向が具体的に如何なる政治空間の再構成を目指そうとしたかは、提示されなかった。

朝鮮王朝において、「家－郷－国」の政治空間の再編成に関する明確な認識が本格的に現れるのは、朝鮮王朝の内部の政治も西洋近代をモデルとする実質的な変革に向かい始める時期であったが、その先駆は、日清戦争の時期に始まった甲午の改革（1894-5）であった²³⁾。すでにふれたとおり、この時期に「天下」と世界の政治空間をめぐる問題は決着がついたが、「国」以下の政治空間に関する議論は、まさにこの時期に本格的に始まったのである。このような動きは1880年代のはじめに設定された空間の分離の突破を意味した。

甲午の改革の中心勢力は兪吉濬などの官僚であったが、彼らは日本の助けを利用しながら、国家を強化することで、西洋近代の広がりによる世界の変化に対応しようとした²⁴⁾。彼等からすれば、近代国家の形成のために、集権的な政治制度の樹立は不可欠な課題であったため、「国」以下の政治空間における儒教的な文明に基づいた自律性は抑圧されるべきであった。したがって、甲午の改革の政策の中で、地方制度改革が重要なテーマの一つになったのも当然であった²⁵⁾。この地方制度改革は、まず「郷」の政治空間の包摂を狙っていた。たとえば、改革の中心機関であった軍国機務処からは、「地方官に命令して、郷会を設置し、各面の人民が聡明かつ老練な一人を選抜して郷会会員を構成する。彼らに本邑の公堂で集まってもらい、政府の命令事項と医療など地方行政事務の可否を評議して、共同で決定し、実行することにする」という改革案が出されたのである²⁶⁾。この案からは、地方官が中心になって郷会を組織することで、地方の基層にも政治に参加する機会を与えるとともに、基層まで行政権力を浸透させると

23) 甲午の改革の具体的な展開については、柳永益『甲午更張研究』一潮閣、1990年を参照。

24) 崔敬浩「第一次甲午更張攷：『高宗實録』から見た制度・改革内容とその運営」『朝鮮学報』46、1968年、61-104頁。

25) 甲午の改革の際に行われた地方制度改革については、金雲泰『朝鮮王朝政治・行史：近代篇』博英社、2002年、358-362頁、及びに、388-390頁を参照。また、身分制や教育までを含めた近代国家の形成から、この課題を取り扱った研究としては、王賢鐘『韓国近代国家의 形成과 甲午改革』歴史批評社、2003年、262-312頁を参照。

26) 『高宗実録』31年7月12日。

いう狙いが垣間見える。1895年11月（旧暦）には「郷約辦務規程」と「郷会条規」を制定することからもわかるように²⁷⁾、「郷」の政治空間をめぐる改革は執拗に推進された。このような執拗さの背景には、近代的な地方制度の樹立という行政的な改革だけではなく、政治をめぐる文明の転換というさらに大きな文脈があった。たとえば、兪吉濬は、福沢諭吉に送った手紙に、これらの改革の狙いについて、「新しい地方行政体制の樹立は、一元化を通じて行政の合理化を図るとともに、開化の支持者を地方官として大いに起用することで、中央政府の地方統制を強化することが目標」であると書いたのである²⁸⁾。つまり、地方制度の改革によって、「郷」の政治空間を国家に包摂すると同時に、地方の政治勢力の文明的な基礎を変えることが追求されていた。

以上のような地方制度の改革による「郷」の政治空間の変容は、既存の「国」以下の政治空間の正当性を当然のものとして考えていた儒教的知識人には、到底受け入れられるものではなかった。その結果、儒教的知識人の一部は、「郷」の政治空間の擁護を掲げながら、激しい抵抗を見せたのである。たとえば、華西学派の柳麟錫（1842-1915）は「西行時在旌善上疏」の中で、「権奸が現われ、新法之開化などといひながら夷狄の政策を推進することが、甲午の年に頂点に至った。地方制度の変革（＝州郡之革）もその一例である」と書いた²⁹⁾。柳麟錫は、甲午の改革を推進する政治家が開化と称しながら行った改革に対して、儒教に基づいた中華と夷狄の枠組みを適用して批判した。兪吉濬のような「権奸」が推進した夷狄の政策の代表的な例として、郷の政治空間を破壊する地方制度の変革が挙げられた。政治をめぐる二つの文明は、郷の政治空間をめぐるぶつかっていたのである。

ところで、甲午の改革における対決は、「郷」の政治空間にとどまらなかった。改革政策は、「家」にまで及んだのである。1895年12月30日に中央政府から男性のまげを切らせる詔勅が出された。いわゆる断髪令である。

27) 『高宗実録』32年11月3日。

28) 兪吉濬『兪吉濬全書（V）』一潮閣、1971年、278-280頁。許東賢は地方制度改革をめぐる朝士視察団の構想と甲午の改革の政策の連続性を指摘しているが、兪吉濬の手紙はその一つの事例ともいえよう（許東賢『近代韓日関係史研究：朝士視察団의 日本觀斗 國家構想』国学研究院、2000年、126-132頁）。

29) 柳麟錫『毅菴先生文集』卷之四「西行時在旌善上疏」。

その命令に対する多数の儒者の反応は、もちろん反対であった。この措置の対象は個人の髪型であったことから、これに対する反対も儒教的な観点から自己の「身」を守る行為に見えるであろう。確かにこの命令は物理的には「身」に関わるものであったが、原理的には「身」だけではなく「家」に、場合によっては「身」よりも「家」に関わる意味が大きい事件であったことを理解する必要がある。たとえば、1896年1月に特進官金炳始(1832-1898)は、高宗への上疏の中で、「身体、髪、肌は父母から譲り受けたもので、傷つけないとは孔子の言葉であります。万世の先生の言葉が、信ずるに足りないとおっしゃるのでしょうか」といって、断髪令に対する反対の意思を表した³⁰⁾。孔子の言葉とは、「身体、髪、肌は父母から譲り受けたもので、傷つけないのが孝の始まりだ」という『孝経』の言葉をさしている³¹⁾。孔子の権威に依拠したこのような論理は、当時断髪令に対する代表的な反論であったが、髪型を守るべき理由は、家の政治空間を支える原理である孝にあったのである。一部の儒教的知識人が断髪令に激しく抵抗したことで大きな政治問題が起きたのは、この措置が「郷」に続く「家」の政治空間に対する攻撃の側面があったことからすると、意外なことではなからう。

以上のことから、甲午の改革の際に、朝鮮王朝の中央政府は、「郷」と「家」の政治空間の自立性を奪うことで、国以下の政治空間を除去しようとする努力を行ったが、このような動きは、「郷」と「家」の政治空間の担い手であった儒学的知識人においては、脅威として受け止められたことがわかる。朱子学の「理一分殊」の原理からすると、すでに天下や国の政治空間をめぐる大きな変化があったとしても、ただちにその下の政治空間が変わるとは限らない。その変化が「家-郷」に影響を与えない限り、日常生活における儒教的知識人が求めた道の実現には支障が出ない可能性もあった。ところが、地方制度改革や断髪令などの措置は、道を実現するために残されていた「家-郷」の政治空間が国によって抹殺されることを意味した。そこで、彼らは本格的な抵抗を試みることになったが、その一つの結果が、一連の義兵運動の出発点となる1895年の乙未義兵であった³²⁾。政治

30) 『高宗実録』33年1月7日。

31) 『孝経』「開宗明章第一」。

32) 柳麟錫が活躍した堤川義兵を中心に乙未義兵を取り扱った研究としては、吳瑛

空間をめぐる文明的な葛藤は、ついに国内政治における政治主体の正面衝突にまでエスカレートしていったのである。

ところで、この政治空間をめぐる政治的対決は、近代の側が急速に勢力を失うことによって、究極的な結論を得ないまま終わってしまった。すなわち、1896年に国王の高宗が甲午の改革を担っていた兪吉濬らが掌握していた王宮から脱出して、ロシア公使館へ移ることを皮切りに、改革の勢力は中央政治から一掃されたのである。そして、政局の主導権を回復した高宗を中心とする勢力は、断髮令を撤回するなどの政策をとることで、「家－郷」の政治空間における道の自律的な追求が再び可能となった³³⁾。その結果、義兵を起こした勢力が高宗の命令に従って運動をやめることになったが、近代国家をめざす政治運動が台頭すれば、必然的に政治空間をめぐる問題が台頭する状況は、そのまま残されていたのである。

5. 国内の政治空間の認識をめぐる折衷と変容

1) 大韓帝国における折衷

1897年に、高宗は大韓帝国の建国を宣言した。この建国には、朝鮮半島においても皇帝が君臨する帝国を創ることで、清や日本と対等な国家としての位置を明確にするという意味があった。ただ、すでに日清戦争の際に、国際政治の空間が世界へ一元化される変化が発生していたため、「国」の上位の政治空間の変化のいう側面からは、この事件の意義はそれほど大きくない。一方、「家－郷」の政治空間には変化の可能性が台頭してきた。周知のとおり、1899年に高宗皇帝によって「大韓帝国国制」が頒布されたが、この文章は皇帝側が考えた大韓帝国の国家像をもっとも明確に表したものであった。頒布の際に、法規校正所総裁の尹容善（1829-1904）が「多数の人々の意見をまとめ、また、公法を参照して国制一遍を定めた」と報告

變「乙未義兵의 結成過程과 軍事活動：堤川義兵 中心을 中心으로」『軍事』43、2001年、101-135頁を参照。

33) たとえば、断髮令の取り消しについては、『旧韓国官報』建陽元年2月27日号外を参照。ただ、「光武改革」の推進の際には、皇帝の命令によって官僚や軍には断髮が強制された（徐榮姬『大韓帝国政治史研究』서울大学校出版部、2003年、109-112頁）。

したが、これに対して、高宗は「その版に対して、多数の意見が同じで、また、外国人の意見も正しいと言っているのか」と確認した³⁴⁾。この対話の中で、公法が言及され、また、外国人の意見が重視されていることから、「大韓帝国制」は西洋近代の側面を持っている文章であることがわかる。すると、大韓帝国の国内政治をも西洋近代をモデルとして変容させることで、政治空間のラジカルな変化が現れる可能性も想定できる。ところが、上記の対話において、公法や外国人とともに、「多数の人々」や「多数の意見」が登場していることも注目すべきである。この「多数」とは、国制の内容をまとめた人々やそれを検討した外国人ではない人々であるため、大韓帝国の官僚や臣民であろう。「大韓帝国制」には当時の朝鮮半島の多数の人々の意見が反映されている面も確かにあった。「大韓帝国制」は西洋国際法と朝鮮王朝の政治理念を折衷したものであることがうかがえる。

このような折衷は、「大韓帝国制」が想定する政治空間の編成において如何なる形で影響したのか。まず、第一条では「大韓帝国は、世界万国の公認されたところの自主独立の帝国である」と規定されている³⁵⁾。甲午の改革の際にすでに世界の政治空間への一元化が行われたことからすると、この条項はその事実の再確認であるが、「大韓帝国制」の折衷的な特徴からすると、この条項において注目すべきは、自主独立の帝国であることの正当性が、世界万国の公認による点である。すなわち、第一条は、大韓帝国の国際的な認定が外国から得られていることの宣言であり、その論理は当時の国際法などによって支えられていた。ところで、第二条では、「大韓帝国の政治は、前にすなわち五百年伝来し、後にすなわち万世不変の専制政治である」となっている³⁶⁾。第二条は時間的な拡散の視点から、500年にわたる王朝の悠久な歴史から、当時の大韓帝国の政治を肯定し、さらにそれを将来の継承の根拠としても使っている。この議論は、第一条の正当化の論理が、空間的な拡散の視点から、すなわち、当時の世界万国による承認から出されてきたことと対比される。その結果、第二条の正当化は、海外の諸国ではなく、朝鮮王朝の歴史を共有する国内の人々によって行われたのである。したがって、朝鮮王朝の国内政治は西洋近代のものとは当

34) 『高宗実録』36年8月17日。

35) 『日韓国官報』光武3年8月22日。

36) 同上。

然異なるものになるのである。朝鮮王朝との連続性の強調からわかるとおり、その主流は儒教を文明的基準にしていた。高宗が大韓帝国の政治を率いていた時点において、国内政治の分野、とりわけ、地方の政治において実際の急速な近代への変化が強制されなかったのは、このような認識からすると当然のことであった。その結果、高宗が政治を主導した時期の大韓帝国では、政治空間における大きな変動は行われなかったため、儒教的知識人による抵抗もほとんど見えなくなっていたのである。

2) 帝国日本による変化

朝鮮半島において、政治空間の問題が再浮上したのは、日露戦争（1904-5）前後の時代であった。ところで、このような現象は「国」以下の政治空間だけではなく、すでに西洋近代への変容が行われた国際政治においても発生した。この時期の朝鮮半島には、恐露論や人種論などの拡散もあって、日本をリーダーとして、ロシアで代表される西洋の帝国主義に抵抗するという「東洋主義」の議論が広がりを見せ、多くの支持を獲得したのである。この流れを支持した多くの人々は、大韓帝国を東洋という地域の一員と見なしたために、日露戦争の際にも同じ東洋の一員である日本との協力によってロシアのような西洋の帝国主義国家から大韓帝国を守るという動きが活発化したのである。その結果、「国-地域-世界」という政治空間の階層が出来上がった。ただ、1905年の第二次日韓協約によって、地域のリーダーのはずであった日本がもう一つの帝国主義勢力であることが明確になることで、地域への政治空間に関する認識が大きく変化することになるが、この動きの最終的な変容は大韓帝国の亡国が確実にされる時期に行われるため、第6章で考察を行うこととする。

一方、第二次日韓協約以降、大韓帝国の主権の一部を奪った帝国日本が、統監府を中心に新しい政策を推進することもあって、国内政治も大きな変容を強いられた。日本による近代の地方までの強制は、儒教的知識人からすると、道を追求するために残されていた政治空間が夷狄に奪われることを意味した³⁷⁾。この動きに彼らは激しい抵抗を展開することになるが、そ

37) 帝国日本の地方政策による郷約の解体をマクロな観点から取り扱った事例研究としては、이광우 (Yi Gwang Woo) 「1784-1945年 慶尚南道南海郡 南面郷約契의

の抵抗の代表的な形が甲午の改革の際と同じく義兵運動であった³⁸⁾。

実際、儒教的知識人の義兵運動は、政治空間の変動によって起き、また、その運動の結果によって政治空間の変動が固着することになる。この義兵と政治空間の密接な関係について、この時代を代表する義兵将であった柳麟錫の例から考察してみよう。周知のとおり、柳麟錫は1896年から1910年まで活発な義兵運動を行ったが、多くの研究者において、この活動は国家のためのものとして理解された³⁹⁾。政治空間の観点からすると、彼の運動は「国」の政治空間のものであったということになるが、この時期における彼の中心的な政治空間は、むしろ「郷」であった。たとえば、大韓帝国が日本の保護国になった状況において、彼は当時の国の政治空間への期待を捨て、地方からの政治運動によって国家の命運を変えることを提案した。すなわち郷約の重層的全国ネットワークを形成し、その全国組織の最上位に立つ中央機関として「都約所」の設置を唱えたのである⁴⁰⁾。士林の登場の際に、「郷」の政治空間の運動を通じて国の政治空間を掌握した経験がある朝鮮王朝の政治史からすると、この提案自体はそれほど突出したものではないかもしれない。ところが、「都約所」の構想には、都約長の存在という大きな変化が加わっていた。すなわち、柳麟錫は「都約長は、一国の望みをもって、一国の心を得る。……都約長が首相になって、一国の政治を握る」と書き、郷約のリーダーである都約長がそのまま首相となる体制を考えたのである。政治空間の観点からすると、「郷」の政治空間が「国」の政治空間の自立性を犯すとも見える、ラジカルな政治空間の再編成を提示したといえよう。柳麟錫は、甲午の改革の際には国による関与に抵抗していたが、国が外部勢力によって左右される状況では、郷の政治空間を根拠にして、国の政治空間の奪還を目指したのである。近代がもた

性格：面約의 構造와 運營을 中心으로」『韓國民族文化』第56号、2015、227-264頁を参照。

38) 1907年の第三次協約以降における伊藤博文を中心とする朝鮮保護政策の推進とその挫折については、森山茂徳『日韓併合』吉川弘文館、1992年、141-178頁を参照。また、この政策へ反対した義兵の思想については、金度亨『大韓帝国期政治思想研究』知識産業社、1994年、311-370頁を参照。

39) 柳漢喆「中期義兵時期(1904-1907) 柳麟錫의 時局對策論」『韓國獨立運動史研究』7、1993、57-85頁；崔富洵「穀菴 柳麟錫의 獨立運動에 關한 研究：滿州・露領地域 活動을 中心으로」『栗谷學研究』2、1995年、557-598頁など。

40) 都約所については、徐珍教「1898年 都約所의 結成과 活動：1890年代 後半 保守衛生層의 動向에 對한 一檢討」『震檀學報』73号、1992年、39-62頁。

らした危機を背景に、郷約を「郷」の政治空間だけでなく、国の政治空間にとっても核心的な機制として捉え直すことで、「国」の政治空間に郷の政治空間を従属化しようとしていた当時の動きに真っ向から抵抗したのである。

ところが、柳麟錫を含めた義兵の指導者たちによる、「郷」の政治空間における運動から「国」の政治空間を取り戻そうとする動きは、1909年9月から2ヶ月にわたる「南韓大討伐作戦」に象徴されるように、帝国日本の徹底的な鎮圧によって失敗してしまった。その結果、儒教的知識人は、ついに朝鮮半島内部における道の実現の空間を失ってしまったのである。このような状況の中で、儒教の文明の生き方を最後まで守ろうとした知識人は極端な選択に迫られた。たとえば、安東地方の李中彦（1850-1910）は儒教的な道の実現の可能性が絶たれたことから、自ら死を選択した⁴¹⁾。また、上記の柳麟錫は、大韓帝国や植民地朝鮮の政治空間においてはもはや許されない道の実現を追求しつづけた。すなわち、彼は中国の東北地域やロシアの沿海州などへ移住し、郷約を結成するなどして、「郷」以下の政治空間において引き続き道の実現を試みたのである⁴²⁾。

以上のような事例は、朝鮮半島における儒教、そしてそれに支えられた政治空間の強靱さを物語っている。ただ、このような極端とも見える選択をした人々は、あくまでも少数であったことも事実である。その結果、1905年から10年にかけての政治変動によって、朝鮮半島において、儒教が支配していた国以下の政治空間への執着も、薄れていったのである。

41) 李中彦の一生については、金熙坤『李中彦』景仁文化社、2010年を参照。また、李中彦を含めた安東地域の10人の儒者の自決については、金熙坤『나라 위해 목숨 바친 안동 선비 열 사람』知識産業社、2010年を参照。

42) 柳麟錫の亡命と亡命地での活動に関しては、毅菴学会篇『毅菴柳麟錫의抗日獨立運動史』毅菴学会、2005年の第3章から第6章の内容を参照。また、儒者の集団的亡命の事例としては、金熙坤『安東내앞마을：抗日獨立運動의聖地』知識産業社、2012年、50-70頁を参照。

6. 政治空間認識の再編成の到達点

前章で考察したとおり、1905年以降、帝国主義との葛藤の中で、儒教に基づく政治空間の認識が崩壊していったが、同じ時期に西洋近代を受け入れながら帝国主義への抵抗を試みる思想の動きも活発化した。愛国啓蒙期と呼ばれる1910年までの言説において、儒教を内在的に批判しながら、国の政治空間を特権化する方へ政治空間の本質的な変化を促す動きが台頭してきたのである。このような変化の様子を、朝鮮半島のナショナリズムの草分け的な存在である申采浩（1880-1936）の言説から確認してみよう⁴³⁾。

申采浩は1908年9月に「家族的観念を打破せよ」という論説を書いて、朝鮮半島における家族観念の強さを批判した。その中で彼は、「小家族の観念を捨て、大家族（すなわち国家）の観念を作る」べきだと主張した⁴⁴⁾。従来の性格の「家」の重要性を否定し、国家こそが大家族であると主張することで、家族の持つ意味をも吸収した形で国家の重要性を熱弁したのである。また、彼は同じ月に「小我と大我」という文章も書いた。その中では、小我である個人が大我である民族・国家の重要性を認識し、その一部として動くべきことを主張したのである⁴⁵⁾。これは個人と国家を直接的につなげる必要性を主張したものであった。ほぼ同じ時期に出された二つの議論を合わせると、朱子学の「身-家-国」の政治空間から「家」を除去し、残された小我の「身」を大我の「国」へと一体化するべきだという論理になる。このような申采浩の国内の政治空間の再編成の作業は、1909年7月に発表された、「身・家・国の三観念の変遷」において集大成された。この文章ではまず、人間社会に関する観念の変化を基準にして、人類の歴史を四つの時期に区分している。すなわち、第一期には、「身」の観念だけがあり、第二期には、「家」の観念だけがあり、第三期には、「家」と「国」の両観念が交替していたが、当代である第四期に至っては国家の

43) 申采浩の思想一般については、申一澈の古典的研究（申一澈『申采浩의 歴史思想研究』高麗大学出版部、1980年）を参照。朝鮮半島のナショナリズムの展開における申采浩の意義については、趙景達「金玉均から申采浩へ：朝鮮における国家主義の形成と転回」歴史学研究会編『講座世界史7「近代」を人はどう考えてきたか』東京大学出版会、1996年、333-360頁を参照。

44) 丹齋申采浩全集編纂委員会、『丹齋申采浩全集（第6巻）』独立記念館韓国独立運動史研究所、2007年、648頁。

45) 同書、648-652頁。

観念だけが輝いていると宣言したのである。人類史の変遷という大きなスケールの枠組みの中で、政治空間をめぐる認識の変化が総合的に提示されたが、その結論は、以前は「国」とともに尊重されていた「身一家」の政治的な自立性がすでに意味がなくなったため、国が排他的な政治的重要性を持つというものであった。

以上のように、国が以前とは質的に異なる政治的な重要性を持つようになったことは、国がアクターとして活動する国家より上位の政治空間にも影響する可能性がある。実際、申采浩による政治空間の再編成の議論は、国際の領域にも広がっていった。彼は1909年5月に「帝国主義と民族主義」という論説を発表したが、この論説では帝国主義を「領土と国権を拡張する主義」と定義した上で、当時の情勢について「世界という舞台が帝国主義のひとつの劇場になった」という理解を示した⁴⁶⁾。彼は、世界という政治空間の性格について、国家というアクターが生存のために戦う舞台と理解し、帝国主義に抵抗する方法として、民族主義の必要性を唱えたのである。次に、同じ年の8月に、申采浩は「東洋主義に対する批評」を発表した。この文章の中で彼は東洋主義を「東洋諸国が一致団結して、西力の東漸を制御することである」と規定した⁴⁷⁾。そして、列国競争時代に国家主義を提唱せずに東洋主義の夢を見ていることは、未来の他の星の競争を心配すること、あるいは、同じ西洋のドイツ、ロシア、オーストリアによって分割されたポーランド人が西洋主義を提唱することと同じ行動であると痛烈に批判した⁴⁸⁾。申采浩は、同じ東洋のはずである日本の帝国主義的な侵略を背景に、国家間の競争を重視する立場にたって、一部の人々によって国と世界の中に存在すると想定されていた地域の政治空間の意義を徹底的に否定したのである。

以上のような申采浩の議論において、朝鮮半島の人々の政治空間に関する認識は、朱子学の「家－郷－国－天下」の政治空間の連続から、国家を境界とした国内と国際の政治空間の断絶へと、本質的に変化したのである。申采浩の議論は、西洋近代との格闘の中で、朝鮮王朝・大韓帝国がたどってきた朱子学に基づく政治空間の解体過程の一つの到達点を見せているが、彼が朝鮮半島のナショナリズムの草分け的な存在であることからわかるように、朝鮮

46) 同書、720-721頁。

47) 同書、686頁。

48) 同書、688頁。

半島の近代政治思想は、このように再構成された政治空間を前提に展開されたのである。

7. 終わりに

本論での考察から、朝鮮王朝後期の儒教的知識人と植民地朝鮮のナショナリストの間に存在した政治空間認識の差が形成された歴史が、明確になったと思われる。彼等の間における政治をめぐる認識の差が、政治の内容だけではなく、空間という枠組みにまで及んでいるという事実を認識することは、朝鮮半島における近代的な政治思想の受容の全体像を描くにおいて重要な意味を持つといえよう。このような政治思想史の新たな側面を明確にしたことが、本研究の根本的な意義といえよう。

それに加えて、以上の発見は、近代朝鮮の政治思想に対する研究の深化に役立つという波及効果も期待される。近代朝鮮における政治をめぐる議論の多くが、異なる文明的な基準を有する政治勢力の間で行われた結果、非常に重要な事例—たとえば、『朝鮮策略』や断髮令—において、意思疎通がうまく取れていなかったことも少なくない。その結果、研究者が各々の立場を理解し、議論を整理することによって、事後的に意思疎通の可能性を図ることも必要となる。このような作業の際に、政治に関わる言説の内容に主に注目する傾向があったが、本研究の成果によれば、そのような作業だけでは不十分であることがわかる。なぜなら政治空間の差に関する認識がなければ、とりわけ、儒教的知識人の言説が想定する政治空間への誤解から、対話の意味をも誤解する可能性があるからである。本研究の成果は、近代朝鮮の政治思想の全般にわたる再構成に寄与する可能性があると思われるが、今後は筆者もこの寄与の可能性を確かめるだけの実証研究を試みたい。

〔付記〕

本稿は日本学術振興会研究費助成金による助成研究（研究課題「儒学政治思想の持続と変容：朝鮮半島の国際政治認識を中心に」/基盤研究（C）/研究課題番号：25380152）の成果の一部である。助成に対して、記して感謝申し上げたい。